

赤木桁平

漱石先生の追憶



附録

(上)

漱石先生の追憶



私は漱石先生に就いて云いたいことあまり多くを持つている。この際何から先きに云つていいか、何を特に云うべきか分らない。すべてを皆云つて終しまいたいような気持もする。すべてを皆云わずに蔵しまって置きたいような気持もする。——何れいずにしたところで、決定的に先生に就いて語るためには、今姑しばらくの凝視と熟慮とを要する。従つて、茲ここに私が述べるところは、こういう私の気持から滲み出た、何等纏まとりのつかない追想録とも云うべき

ものであって、先生を永久に記念すべく、特に私が選んだ言葉ではない。

私が初めて漱石先生の書かれたものを読んだのは、今からもう十年も前のことである。その頃まだほやほやの中学生であった私は、須田という文学好きの同窓生と相談して、お互いに乏しい小遣い銭を出し合いながら、東京から例の『猫』を取寄せて読んだ。勿論文学に対する真当の理解などというもののある筈はなかったが、それでも猶<sup>な</sup>お二人にとって『猫』は非常に面白かった。その後須田が盛んに先生のものを買集めるので、私は大



抵須田のお蔭で先生の作品に親しんだ。その中で最も私を感激させたものは、雑誌『ホトトギス』に発表された『野分』であった。殊に『野分』の結末くんだりの方にある白井道也の演説であった。私はあの演説の条くんだりを読んだ時は、息が詰るほど昂奮して、眼から涙の滲み出たことを覚えてる。

そのうち文学好きの須田が肺病に罹って死んだ。親しい友の死に依って、私は偶々たまたま先生の作品から遠ざかりがちになったが、併しそれもあまり長い間ではなかった。恰ちようど度岡山の高等学校に這入った頃から、私は再び先生

の作品に親しむようになり、それからというものは、先生の署名さえあれば、何でも彼でも手当り次第に読んだ。そして非常に感激した。中にも『漾虚集』ようきよしゅうを読んだ時の感激と、『それから』いえどを読んだ時の感激とは、七八年を経過した今日といえど雖も、猶なおありありと思ひ浮べるこゝとが出来るほど強く私の心を動かした。

先生の作品を愛敬するの念は、漸次先生の人格を愛敬するの念となった。そして私は断えず『猫』の苦沙弥先生を通して、『野分』の道也先生を通して、『虞美人草』の甲野さんを通して、『それから』の代助を通して、自



分に最も親しい先生の影を空想の裡うちに描き出していた。そこへ例の博士問題なるものが持ち上った。私は事件の成行をじっと見成みまもっていたが、先生は到頭とうとう最後まで「博士号などは要らん」と云って頑張られた。その時私は涙が零こぼれるほど嬉しかった。現実現実に於ける先生と、私の空想の裡に描き出されている先生の影とが、痛快なほど同じ方向にのみ動いて行ったからである。

それから私は『門』を読んだ。『門』を読んでから引き続き、『彼岸過迄』を読んだ。『門』に描かれている宗助夫婦の生活と、『彼岸過迄』に出て来る松本さん

の性格とが、またまた私の心を強く打った。私は先生に逢いたくなくなった。親しく先生に逢って、眼のあたりに先生の姿を見、口ずから先生の言葉が聴きたくなくなった。恰度そこに与えられた機会が来た。

大正二年の九月、私は法科大学に入学するため上京した。そして兼ねて相識の間柄なる鈴木三重吉氏の宅に繁々出入している間に、よく鈴木氏の口から先生の消息に就いて聞いていた。ところが多分十月の中頃であったと思う。或日用事があつて、鈴木氏と一緒に牛込辺を彷徨うろついていた時、不ふ図とした機会から鈴木氏に連れられて先生

の宅を訪ねた。慥<sup>たし</sup>か木曜日ではなかったが、先生は宅にいられた。二人は早速書斎の隣りの応接間に通されて、そこで先生に逢った。それまで私は雑誌の口絵なぞで三度先生の写真を見たことはあるが、私が初めて眼のあたりに見た真物の先生は、それらの材料から私が恣<sup>ほし</sup>いままに描き出していた想像裡の先生よりも、私にとっては遙に年寄り染<sup>じ</sup>みた感じのする人であった。私は鈴木氏の傍らに坐って、じつと先生と鈴木氏との間に交換される会話を聴いていたが、先生の態度は極めてイージーで、何物にも拘<sup>こだ</sup>わるところがないという風に、時々微笑を交

えながら、いろんなことを自由自在に話していられた。そして私にも時々何か話しかけ居られたが、平素無遠慮に慣らされている私も、さすがにその時だけはどうも思うことがすらすらと口に出て来なかった。先生との対座は約一時間ばかりで、二人はやがて先生のところを辞し去ったが、私は途中で鈴木氏と別れ、独り本郷の下宿に帰る道すがら、電車の中で、その日初めて逢った先生に就いての印象を、いろいろと思ひ返して見た。

実際、その時の私にとって、先生はまだ一面の識もなかつた他人というよりも、寧ろむしこれまで私が屢々しばしば接して

いたところの、若くは屢々自分の頭の中に、或は理想の影として、或は要求の対象として、常に描かれつつあったところの、私の最も親しい、私の最も心安い「伯父さん」に会ったというような気持がした。そしてこの人になれば、すべてのことを打明けてもいい。すべてのことが許される。すべてのことが理解されるといような感じがあった。それまで先生に対して私の抱いていた愛敬の念は、さらに実感の着色を濃厚にして、何となく懐しい人、何となく慕わしい人というような気持の裡うちに移って行った（しかもそういう気持は、今度先生が御亡くなりになり

なるまで、終始一貫私の感情を司配して、すこしも<sup>かわ</sup>渝るところのないものであった。

初めて先生に逢つて以来、さらに倍加した私の先生に對する感激は、私をして直ちに無謀ともいふべき企てを思い立つに至らしめた。それは先生に獻げるために、先生に對して抱いている私の愛敬の念を披瀝するのために、私の裡に<sup>みなぎ</sup>漲っている全感激を傾倒して、一篇の『夏目漱石論』を執筆しようということであつた。この意図は直ちに実行となつて現れた。私は本郷追分の下宿屋の二階に立籠つて、まるで戦陣に臨むような意気込で、先<sup>ま</sup>ず

それまでに発表されている先生の作品の殆んどほと全部を再読し、それから愈々いよいよ本論の筆を執った。併し、頭の十分錬れていないのと、表現の技倆がかなり貧寒であるのとのために、私の筆は兎角とかく渋り勝ちで、最後の一句に至るまで、遂に満足という感情を経験することが出来なかった。私はそれが遺憾であった。併し、雑誌の締切期日は切迫し、私の気力は衰えていた。何れの意味いずに於いても再稿の余裕は見出せなかつたので、私は半ば絶望的な気持で筆を擱おいた。

出来上った『夏目漱石論』は、大正三年正月号の『ホ



トトギス』誌上に掲載された。大阪の自宅に於いて、如何にも麗々しく刷られている自分の文章を見た時、私は何となく空怖ろしいような感じがした。併し、強いてそういう感じを自分の意識面から払拭しながら、自ら先生に宛てて一書を裁し、「このたび『ホトトギス』に書いた私の『夏目漱石論』は、その実質に於てかなり貧寒なものに相違ないということを自覚していますが、私自身としては、それでも猶<sup>な</sup>お世間の人々を対象として書くというよりも、寧ろ先生御自身に読んで頂くために書くというだけの覚悟はあったのですから、先生から御覧にな

ると、いろいろ眼だるいところもありました。そういう私の気持に免じてどうか終りまで御瀏読りゆうどくを願います」というような意味のことを云って送った。折返して先生から返事が来た。その返事の内容は、私が私の近著『芸術上の理想主義』の巻頭に、嘗かつて序文として掲載したところのものである。

なるほど今から見ると、その時の実感が正直であったごとく、私の『夏目漱石論』は洵まことにお粗末至極なものであった。従って、ああいう悪文を臆面もなく発表したかと思うと、沁々しみじみ後悔の念が湧いて来ないではないが、

併し私には唯一つの慰めがある。それは何であるかとい  
うと、あの六十余枚の文章が徹頭徹尾「感激」の産物で  
あつて、その中には一字一句と雖も、いんげん浮の空や口の先  
きで云われた言葉が無いということである。この慰めに  
依つて、私はこの文章を敢て自分の文集中にも採択した  
わけであつた。

それから以後の三年間というものは、私が親しく先生  
の警咳に接して、心ゆくまでに先生に懐しみえたところ  
の三年間である。殊に、この一年半ばかりの間は、木曜  
日の夜とさえ云えば、雨が降ろうが、風が吹こうが、の

つぴきならぬ差さしつか問えがないかぎり、必ず早稲田の漱石山房を訪れて、やっと終電車の間合あう頃まで、先生を中心に、そこに集って来る多くの知己先輩と、極めて自由に、極めて我儘に、自分の思うところを語り合った。

就なかんずく中、木曜会に於ける先生は、何とも云えぬほど面白い（不適當な語彙ではあるが）人であつた。始終上品な皮肉や諧謔を交えながら、例の先生独特の警拔な比喻と、例の卓越した先生一流の創見とを以て、或は小説を語り、或は絵画を談じ、毫ごうも倦怠の色を示されなかつた。殊に、そこに集って来る総すべての人に対して、その地位身分の如

何に関わらず、すべて平等の親密さと待遇とを与えて、如何なる人の言にも耳を傾け、如何なる話題にも興味を感じられた点は、自分等の心から推服したところであった。そういうわけであるから、漸次先生との馴染が重つて来るに従い、かくいう私などは随分無遠慮なことを云って先生に肉薄することもあったが、併し、先生は毫もそれを心にかけるといふことなく、例の調子で軽く受け流しながら、平然として微笑を続けていられた。私はその際に於ける先生の態度を見て、いつも底の知れないほど偉い人だと思っていた。

殊に漱石山房に於ける最終の木曜会の晩は（去月十六日のこと）、先生の機嫌が平生よりもさらに善く、始終にここにこしなから、例の「則天去私」ということに就いて話された。だから、その次ぎの木曜日に漱石山房を訪れて先生が御病気ということを知った時にも、別に大したことはないのだろうと独り決めにして、そのまま見舞も云わずに帰って終しまったぐらいであった。けれども小宮豊隆氏から手紙を貰って、先生の御病気が並々ならぬ重患であるということを知った時には、自分は心底から喫驚して、取るものも取り敢えず、直ちに漱石山房に馳け

附けたところが、私はそこに深愁に包まれている多くの人々を見出し、さらにさらに驚きを大きくした。——それから以後の事実<sup>じじつ</sup>に就いては、この際私は多くを語るに忍びない。

兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>、先生は多くの家族と、多くの朋友と、多くの門弟と、さらに先生を敬慕する多くの人々とを遺して、永久にこの世から去って終われた。そして先生が非常な自信と意気込とを以て、新らしい覚悟と信念との上に筆を執られたらしい最後の小説『明暗』は、終に未完小説として、永遠に先生の惨<sup>いた</sup>ましい死を記念することになっ



た。それが先生御自身にとって、どれだけ心残りのことであつたか、どれだけ遺憾なことであつたか、私はそれを想像するだに堪えない。併し、私一個の考から云うと、<sup>たとい</sup>仮令『明暗』が未完のままに終つたにしたところで、その芸術的価値は毫も毀損されなければかりでなく、先生の表現せられようとした精神なり信仰なりも、恐らくは、あの裡から十分覗い知ることが出来ようと思つてゐる。それが私にとってせめてもの慰めである。

先生は死なれた時が<sup>ちようど</sup>恰度五十歳であつた。五十歳と云えば、かのトルストイが人生觀の一変に逢会し、<sup>いよいよ</sup>愈々

宗教的生活の第一歩に入るべく、始めてグリーキの原書しみじみから聖書を読み始めた年である。それに想い至ると、沁々先生しみじみの死の早過ぎたことが思い痛まれる。殊に最近の先生は、何処となく元気に充ちていて、もう二三年もすれば、帝国大学で文学概論の講義がして見たいなどと云つていられたので、私は一入先生ひとしおの死を残念に思う。仮令トルストイに於けるがごとき長寿を先生に望むことが出来なくても、もう十年ばかりでも生き永らえていられたなら、今後先生はどれだけ偉大な仕事を成し遂げられていたかも分らないし、またそれに依って、われわれ人類

がどれだけ利益を享けていたかも分らない。こういう意味に於いて、先生の死は、独りわが国の損失であるばかりでなく、広く全人類の損失だと思ふ。

この私という一個の人間にとっては、親しく先生の警咳に接して、眼のあたり先生の姿を見、口ずから先生の云われる言葉を聞いたということが、もと素より私の生涯に於ける大事件であつたに相違ないが、先生の死は、先生の死の床に侍しえたということとは、それよりも猶なお私の生涯に於ける大事件であつた。従つて、私は今後長く先生の偉大なる業績と、先生の偉大なる人格とを追想して、

新しく先生に対する感激の念を甦もよほらすであらうとともに、また、親しく先生の死の床を見成みまもった瞬間に於ける私の厳肅なる気持をも私の生あるかぎり永久に忘却することはあるまいと思う。それほど先生のすべては私にとつて偉大なものであつた。

鈴木三重吉氏は、読売新聞記者に語つて、先生の死顔が何となく淋しい人であつたという気持がしたと云つてゐる。それに就いて想い浮べるのは、今から半年ばかり以前、私が先生に揮毫を願つた時のことである。その時私は特に李白の「古来聖賢皆寂寞こらいせいけんみなせきばく」という句を選んで、

先生にお頼みしたところが、先生は幽かに微笑して、「君は馬鹿に李白が好きだね」と云われたので、私は直下に「はい。そういう名句を吐くから李白は好きです」と答えると、先生は唯「呷うん」と云ったまま筆を執られた。その時の先生は、この李白の句を見てどんなことを考えられたか、どんなことを思い浮べられたか、それは一切私には分らない。けれども、この私の眼に、芸術家の最後というよりも、寧ろむしより多く哲人の最後という風に映った先生の死顔は、また全く同じ理由の下に、鈴木氏の眼には淋しい人として映ったのかも知れないと思う。

満腔の感激の下に、この貧しい追想記の筆を擱く。十二月二十一日午前四時、早稻田夏目邸に於ける先生生前の書齋に於いて、先生の新霊の前に通夜しつつ。







日本文学電子図書館

---

## 附録（上） 漱石先生の追憶

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社

2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館